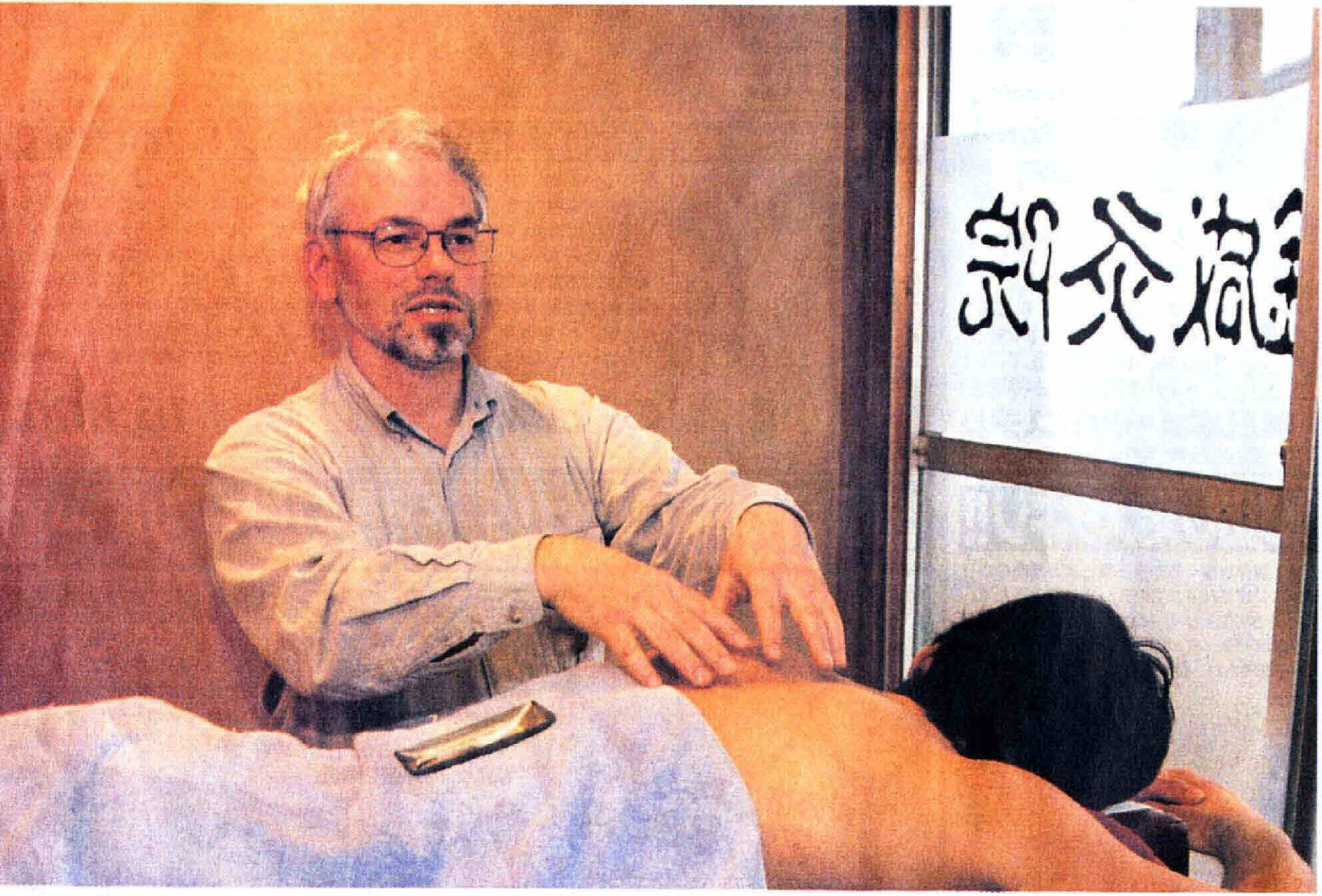
青い目の鍼灸師



患者の心も分かります

帰り際、あまりの心地よさに予約を打診した。返ってきた言葉は「いくら鍼を打ち、指圧をしてもあなたが健康になりたいと思わなければ駄目」。代わりに腰の筋肉を鍛える簡単な体操を教えてくれた。商売抜きのアドバイスだった。（桂　幸生）

第３種郵便物認可

神奈川新

青い目の鍼灸師

ベッドに横になるなり、触診が始まった。「腰はどうしたのかな」「そう。大学時代に痛めたの。今も悪いね」。青い目の鍼灸師は流暢な日本語を操る。

絶えず言葉をかけながら背中のあちこちを指の腹や手のひらで押したり、つかんだり。記者の発する「悪い気」をついに読み取ったのか。「うーん。肝臓も良くないな」。見立てにドキリとさせられる。

肩、腕、肝臓…。金色の鍼が打たれてゆく。チクリともしない。いつのまにか大きな温かい手で背中のツボを指圧されていた。驚くほど自然な流れ。身も心ももみほぐされていく。

ドイツ生まれのトーマス・ブラーゼイェーヴィッツさん(49)。

「体に手を触れるだけで悪い気を感じて患部がどこにあるか分かるんです。以心伝心、患者の気持ちも分かります」

「治った」と聞けば、「もう来ないで」と切り返す。葉山で十年余、日本語の医学書をドイツ語に翻訳する傍ら、「患者が健康管理に目覚め、来院しないようにする」という異色の施療方針を貫く。

インターネットを見て、鹿児島から来た学校の先生もいた。自分の両手で人が元気になってゆくのがうれしい。